

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出会いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

通信販売
いたします

地図の専門店

- 地形図、空中写真、海図、地質図の販売
- 特注地図、地図データベースの製作販売



国土交通省国土地理院特定販売店
株式会社
アルプス出版社

名古屋市中区東桜二丁目21-11 (CBC筋向)
電話 (052) 931-1005 (代) FAX (052) 932-1312
<http://www.alpspublishing.co.jp/>

企画・制作：株式会社新聞ビル

元気でできる“ことばたち”

127

村上信夫

(アナウンサー)



県加須市の青年会議所主催の講演がきっかけだ。会議所の専務理事をしていた関口隆さんと交際の末、97年7月に結婚した。バンクにどっぷり浸かっていた自分に新し

が、適合者は現れなかった。万事休すかと思つた矢先、万に一つの確率でと、母が再検査を受けたら、なんと適合した。しかし、喜びもつかの間、病状は進行し、細胞のほとんどがガンに侵された状態だった。7人の医師団のうち6人が移植に反対した。残る1人も「成功の可能性は1%」と

■村上信夫プロフィール

NHKチーフアナウンサー
1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元気でできることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

1%もあるやん

大谷貴子さん

い世界を教えてくださいました人だ。「この10年で夫の頭髪は10万本減り、私の体重は10キロ増えた」と大阪人のノリで話す。

言った。それを聞いた姉が「1%もあるやん」とあつげらんと言いつつ、その言葉が、慎重な医師団の決意を促した。

姉の愛ある叱咤

千葉大学の大学院で英語の研究者を目指していた。修士論文の提出を控えた86年12月、発病した。治療には、骨髄移植しかなかったが、提供者と患者の型が適合しなければならぬ。親子では可能性が低い。他人同士でも、500人から10000人に1人の確率と言われる。ただ兄弟姉妹では、4分の1の確率で適合する。姉との一致に望みを託したが合わなかった。卒業アルバムを手がかりに、同級生一人一人に電話して、必死の思いで依頼した



俳画/イネ・セイミ

周囲が沈みがちな中であつて、姉の深い愛情と叱咤激励は大きな支えになった。妹が病氣と聞き、住んでいたアメリカから、急遽帰国してくれた。姉は「親が泣いてばかりだったから、私がやらなければ」と思つたからと、後にパワフルな言動や行動の理由を教えてくださいました。大谷さんは、「逆の立場だったら、決して、あそこまでできない」と思つた。「骨髄バンク作つたら?」と言つたのも姉だった。アメリカの骨髄バンク事情も調べた上で、「貴子に間に合わなくても、誰かの命に間に合えば、生きた値打ちがあるよ」とこともなげに語つた。明けて88年、1並びの1月11日に、移植手術は行われた。大谷さんはこの日を第2の誕生日と呼んでいる。去年2度目の成人を迎えた。助けられた命を生かして、白血病のために役立ちたいと、退院後、骨髄バンク設立に向けた活動を開始した。患者たちには、「今日を信じてください。今日寝たら、明日が今日になって、その今日を信じてほしい」と、自らがそう思い続けて生還した体験に裏打ちされた言葉で励ます。医師と患者の架け橋になるには、プロの知識を身につける必要があると考え、92年には、初級カウンセラー、94年には、精神対話士の資格を取得した。実は大谷さんの両親は、最高裁まで

に及ぶ長い離婚調停の後、発病と時を同じくして、離婚していた。一昨年6月、父は胃がんで死去したが、その半年前に、両親は復縁した。亡くなる半年前、父が自ら母に看病を頼んだのだ。父の病床に家族が全員顔を揃え、家族がまた一つになった。

内科医だった父は、大谷さんが白血病とわかったときは、わが娘を救えない絶望感から泣いてばかりいた。しかし自分の発病後は「自分が、子どもより先に死ぬるとわかって良かった」と、穏やかに語っていた。父に反感を抱いていた時期もあつたが、「父がいるからこそ、自分がある」と気づけた。病氣を経験して多くの感情に出会つたことが、大谷さんを成長させてくれた。「生きていくそのこと自体が人の役に立つ。小さな積み重ねが誰かのためになる」。大谷さん自身が、誰かのために生き続けたいのだ。



好評
発売中

■イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。



俳画教室開講中

ところ 常滑屋
とき 月二回 第二・第三金曜日
午後一時~三時
会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三五〇四七〇)

フルート奏者 イネ・セイミ

「一音一音
いとおしむように
奏でる音色
貴方に幸せを
届けます」

コンサート依頼はこちらへ
☎0563(32)0583
(セイミオフィス)

愛知県立大学名誉教授

山田正敏



この街道筋は、大型観光バスが列を連ねて行く。まずボディックの村での買物。石彫りの村は、車内からの見学。木彫りの村で買物。日本に持ち帰れない村の工芸品店は、素通り——とは、よく考えられたツアー・スケジュールである。

七〇年代から時々バリ島を訪れている妻から、すでに、このチュルクの銀細工は見せてもらい、説明も聞いていた。この銀細工の特徴は、細い銀線でデコレーションする線条細工。細い銀線を何本も縊り重ねて蝶や花などの可憐なブローチやイヤリングが作られている。その出来は芸術の域にまで達しているといつても過言ではない。"おみやげ"である。そのパッケージは、バリらしく、ヤシの葉で細く編んだ蓋付きの籠。その中に綿にくるまれて銀細工が入っ

同じような姿。いまや、バリの男の「権勢と富の象徴」であるクリスを飾ったチュルクの金銀細工の歴史や霊力・魔力をもつ細工師の面影はない。若い女性の銀細工師が繊細な指先から作品を編み出してゆく。この職場はもうバリ島の女性の職場。その職場が、日本の女性観光客を酔わせている。

この喧騒と、引きも切らぬ接客の日々の中に、彼女は永い年月暮らしていたのだろう——と、私は思いを馳せた。

《伝統的なバリの村に住む》④

地域からの来訪者

はじめの来訪者

その来訪者とは、管理人の紹介による、同じバンジャール(部落)に住む、世話役の娘さんである。管理人の話によれば——彼女は、日本語を話すことが出来る子で、二〜三ヶ月前までは家を離れ、金銀細工で有名なチュルクという村で、日本人観光客相手のお店に勤めていたが、精神状態が不安定になり、体調を乱し、心配した親が勤めを止めさせ、いまは自宅で静養している——との由。この家で、子どもたちが日本語を勉強をしているという話をしたところ、この家に遊びに来たがっているが、よろしいか——という話である。

その「地域からの最初の来訪者」が、精神病とまでは言わないまでも、精神状態を不安定にし、しかも「体調を乱し」ている若い女性とは——。あまりにも「皮肉な出会い」である。私には、彼女が心身の健康をなぜ害したのか、その理由は、管理人の彼女の紹介の言葉を通して、「一瞬の衝撃」と共に、おおよその「見当」がついた。

それは、彼女が、しばらくチュルクという村の金銀細工の店に勤めていたという話を耳にしたからである。チュルクという村は、空港・州都テンパサルから、私が学校調査を行ったウブド・プリアタン村に通じる沿道の村である。(10号地図参照)このウブド・プリアタン村は、バリ絵画・バリの伝統舞踊・音楽の発祥の地であり、バリ島を訪れる観光客は、一度は必ずといってよいほどよく訪れる「バリ島観光のメッカ」である。

旅、とりわけ観光旅行には、「お土産」はつきものである。もともと「お土産」とは、「旅先で買って持ち帰る、その土地の産物」をいうのであるが、日本の観光みやげは、産地不明の「レール商品」ともいわれる観光地のどこにもある「おみやげ」が増えてきているように思われるが、この街道筋の伝統工芸品は違う。手織り手染めの布、噴火で出来た柔らかい火山性凝灰岩に緻密に彫刻された石像、柴檀・黒檀などの木彫られたバリ島特産の大・小の竹でつくられた家庭用品など…。どれをとってみても、その土地の素材を加工した「真正銘のおみやげ」である。

この申し出を断る特別の理由もなく、かえって、日本語ができる村人と知り合えることは、願ってもないことであり、妻を介してこの管理人の申し出には、「承諾を即答した。」

この観光プールの詳細な推移は、定かではないが、私がはじめて訪れた92年頃は、航空券も容易に入手できないほどのプールの最中であつた

《精神状態不安定になったバリ島の娘さん》

《日本人バリ島観光プールの陰で》

それにしても、この管理人の彼女の紹介の冒頭の言葉——、「精神状態が不安定になり、体調を乱し……」

この喧騒と、引きも切らぬ接客の日々の中に、彼女は永い年月暮らしていたのだろう——と、私は思いを馳せた。



花筐

繭の木

—はながたみ—

小林玲子

「逃げ水を追ふ旅に似て」

わが人生

能村登四郎

野に陽炎の立つ季節になった。「逃げ水」は春の季語で、武蔵野が有名だそうだが、農道などを車で走っていると、はるか先に水溜りが見える。雨などなかったはず、と思つて近づくと、なにもない。中国では地鏡といつて、地球上どこでも見られる自然現象である。

人生は、手枷足枷に縛られて、なくもがなの荷を負うて、とぼとぼと見果てぬ夢を追つて生きるのが常で、思いどおりに運ぶ人生などあり得ない。平穩に何も無い人生があれば、それは、退屈で空虚で「苦の娑婆」に似合わない。

人は、時代に縛られ、世間に縛られ、家に縛られ、己の思いに縛られて、生きていく。「逃げ水を追ふ」のが人生である。

人の一生を思うとき、様々な状況の中で、時に誇らかに、時に悄然として歩みながら、いずれも何処かへ消えていく。

花になぞらえての拙文に、まことしやかに登場させた人々も、同じく重荷を負うて人生を生きた、また、生きている、思えばいとおしい人々である。個人を語るなど不遜きわまりないことで、拙い筆にのせるべきではあるまいが、不届きにも私は、またこうしてペンを執っている。

今回の「繭の木」を想い出した人はわが舅で、やはり、ひたすらつましく市井に生きた人であった。舅は、後に入婿となる本家の隣りの分家に、明治四十一年長男と

して生まれた。三歳の時チフスに罹り、同じく罹患した母が子供を残して亡くなった。舅は命を拾った。

残された父と子は本家の世話になつていたが、後添いがきて分家に帰り、継母には三人の子が生まれた。父親は舅が旧制中学のとき亡くなつてしまひ、継母は自分の子に家督相続させるため、舅の本籍を一年だけ余所へ移している。舅が亡くなつたときの相続でそのことを知つたが、舅の境遇を垣間見る思いであつた。

大学は特待生で、卒業後銀行に勤めた。世界恐慌の時代である。

本家の伯父が病に倒れると、三人姉妹で男子のなかつた伯父は舅を急遽名古屋から呼び寄せ長女と結婚させ、入婿にした。

私が金時計の特待生のこと話を向けると、「わたし(舅は自分のことをわたしといつた)は、頭のいい方でなかつたから、とにかく、こつこつ勉強した。それが仕事だつたら。一所懸命努力して、それでできなければ、それはそれで仕方がない」と言つた。この信念は、子や孫の教育方針にも表われて、生涯、孫に付き添つて勉強をさせたが、テストの結果を云々することはなかつた。金時計は実家に置いてきた、というの舅らしかつた。

私の父も、母方の伯父も舅とは別の同級生で、一歳半で父を亡くした私は、父親のことを舅に聞くのが楽しみであつた。私がこの家に嫁いだ頃は、舅は農協に勤め、夜は英語の塾をして中高生を教えていた。勤めを辞めてからもラジオの英会話の時間で勉強していた。「孫を教え



■小林玲子プロフィール

愛知県西尾市生まれ。

《著書》

童話『サケの子ピッチ』(KTC中央出版)

随筆集『海辺のそよ風』(アトリエ出版企画)

るには、今の教育を知らんとできんから、塾も続けている」という。舅にとつて、家の継続は最大の命題で、子の教育も孫の教育も自分が為すべき義務と思ひ込んでいた。私は子を預けて楽であつたが、自由を奪われた子は、少なからぬトラウマを背負つてしまつた。善意の固まりであつたから文句は言えなかつた。

「わたしの人生は、人を教育するだけだつた」と話したことがある。確かにそれは命がけで楽しみもそれだけに集約されていた。

私が嫁いだ頃のお風呂は焚き口が外にあつた。終い風呂に入つていると「ひと焼べせんでええかね」と声をかけてくれた。この家にも味方がいる、どうれしかつた。

肉親と縁の薄い人で、他人の中で苦勞したことが知られた。神仏に帰依し、祖先を敬つて、平成元年に亡くなつたが、崇敬する天皇の崩御を悲しんでいたから、同じ年に逝つたことは縁のあつたことかもしれない。明治生まれの人らしく、律儀で忍耐強く、家を守ること一生を費やした。

「夕月は水色なせり繭の花」

草間 時彦

親戚の庭に数百年は経つモチノキがある。その聳え立つ大木を見た舅は、家の庭にも植えたいと言つて、込み合っている庭の隅に苗木を植えた。

モチノキは固く締つた樹で、成長は遅いが形のよい木である。毎年四月ごろに、葉のつけねに黄緑色の地味な花をつける。十一月には丸い実が赤く熟してたくさんつく。華やかさはないが秋の実りは美しい。小鳥が喜んで啄むから、種を落して方々に実生の芽が育つ。「命あるものを無暗に伐るでない」との舅の声が聞こえるが、可哀相と思ひながら伐る。枝ぶりが整つてきたモチノキを見ると、やはり端正に生きた舅と重なる。

地主の家へ入婿の舅だつたが、終

戦を境に暮らしが一変し、農地改革や財産税に苦しみながら、家族を支えて懸命に生きた。慣れない農作業もしたが、「出入りの者に百姓の仕方を聞いても、笑つていて教えてくれなんだ」と語つたことがあつた。

農協の金融部でのエピソードがある。仕事が終ると、毎日出納のチェックをする。ある時、一円の不明金が出た。帳尻を合わせるのに手間取り、係の女性が私に負担させて下さい、と泣きだした。舅は「金額の多寡ではない。どこで間違つたのかを調べているのだから」と、分かれるまで調べたという。

これを私に話した人は、融通のきかない人という非難めいた口ぶりであつたが、正確さを求める金融の仕事は、かくあるべきと思う。いささか女性的で、内股気味に歩いたが、一本貫く忠があつた。

姑は六十二歳で亡くなり、舅は八十二歳まで生きた。「わたしは丈夫でなかつたから、気をつけてきて、長生きできた」と言い、「もうなにも心配することはないが、長生きすることだけが、わたしが若いものにしてやれることだ」と言つた。早くに肉親を亡くした人の言葉であつた。嫁の親は脳卒中で、十年生きて亡くなり、若くして家長となつて、時代の波にも晒され必死で家を守つたのであろう。

二人の孫が大学に入ると、気力が衰えて臥せりがちになり、若い頃は短歌なども詠む人だつたから、床の中で徒然草や方丈記などを私に朗読させて、黙つて聴いていた。今思えば、もつとやさしく穏やかに読めばよかつたのに、と臍を噛む思いである。

今まで「花筐」として、身内や心に残る人々を俎上にのせてきたが、覗いた筐の花をあるがまゝ写すのではない。覗く自分を裸にして、恥を書くのだと思つている。

この言い訳も謝して、拙い筆を擱きたい。

